

本篇「教育実践篇 人間を作る法」上・中・下三巻は、教育がテーマであるが、単に「子供の教育」とどまらず、老いも若きもすべての年齢に通じる、いわば「人間教育」全般にわたっている。だから、本篇の第一章は「人間教育の根本的的人生観」となっている。「人間教育の根本的的人生観」とは、即ち谷口雅春先生の説かれる「唯神実相論」であることは言うまでもない。

その第一章の小見出しは、「一、調和ある人生観が一切の本」「二、不良中学生改善の実例」「三、一言で尋常小学生が良くなる」「四、吾れ観世音菩薩と一体なりの自覚」

「五、観世音菩薩が授けられた書」「六、リユーマチが即座に治る」「七、常住月経で結婚不能者治る」「八、疣、胃潰瘍等治る」「九、言葉の力で子供の成績よくなる」「十、天地一切と和解せよ」「十一、人類無罪宣言」となっており、教育問題のほかに治病の体験例が数多く収録されている。

これからも分かる通り、本篇は、すべての人間が生きて生活する上で必要不可欠な教育論であり、人生論であり、宗教論であり、人間論であり、生活論である。本篇のタイトルが「人間を作る法」である所以である。

そして、谷口雅春先生の教への最大特徴は、宗教が単なる宗教ではないということである。そのことを谷口雅春先生は次のように説かれている。

「世の中に宗教の著述は数多い。大徳碩学の著述もある。その説くところも概ね正しい。しかし、その宗教が書物の上、講壇の上での宗教であって、生活になって来ないのは、この『今、起つ』の自覚、『今、実に久遠の仏がここにある、今実に久遠の神性がここに在る。今すぐ起って久遠の神を生き、久遠の仏をこの身、この生活に生きる』と

いう自覚がないからであります。今迄の私もそうであった。宗教がただの宗教的感傷や哲学的な思索だけであったのが、この『今、起つ』の自覚によって、実生活にちゃんと生きるということになったのが『生長の家』であります」（一九頁）

病氣は医学の分野であり、不幸は人生論の分野であり、貧困は経済の分野であり、心の安心は宗教の分野であるところに、宗教は現実の我々の生活とは切り離されて、現実を変える力を失い、無力なものとなってしまったのである。

谷口雅春先生の教えは、すべてのものを変える凄じい力すさまじいちからを有あっている。そしてその力はあらゆる分野に及んでいる。だからこそ病氣が癒やされると同時に、経済難は解消し、家庭不和が消え、当然ながらその力は教育にも及んでいる。その各分野で幾多の奇蹟的な体験が生まれたのである。

本書には、勉強嫌いが勉強好きになった少年、家庭でも学校でも暴力を振るう少年、寝小便の子供が治った話、癩癩てんかんの少女が治った話、等々の体験が次々に紹介されているが、なぜそのような顕著な体験が生まれるのか。

例えば、谷口雅春先生は、おねしよをする子供に困り果てた母親に対して、まず母親を指導する。おねしよをする子供は母親の心配の念の反映であると論ごんされる。子供の問題はすべて親の心が反映したものだと言いわれる。その言葉に素直に従って母親の心が一転し、子供は円満完全な神の子だと観じたとき、おねしよをする子供の姿は瞬またたく間に消えていたのである。

谷口雅春先生の「生命の教育」は「解放と引出ひきだしの教育」である。子供への束縛の解放と子供の神の子たる真相を引き出すことが「生命の教育」の核心であることを説かれている。

「人間本然ほんぜんの善さをすべての人に知らせること、これこそ人間の本当の教育でありま

す。この人間の神性しんせい、仏性ぶつしょうを現すという真実唯一の教育が『生長の家』の教育法なのです。この教育法によりまして人々を教育して行つたならば、大いなる効果をあげられることは必然であつて、現に『生長の家』の教育法によって多くの効果を上げて

いる方がたくさんある」（二〇七頁）

さらに、本書では唯物論とそれに基づく左翼運動についても言及されている。唯物論による教育とそこから導かれる左翼社会改造運動は必然的に暴力的な社会改造運動となることを指摘されている。本書が執筆されたのは昭和十年代であるが、この時代も、大東亜戦争後から今日に至る時代と同様、唯物論と唯物論教育が盛んだったことが窺える。そして、この唯物論と唯物論思想に基づく左翼運動の決定的誤謬について、谷口雅春先生は次のように鋭く指摘されている。

「本来絶対的存在であるところの自分、無形の自分、本質に於て神と同体の、キリスト、釈迦と同体の自分、既にすべてのものを完くそなえているところの自分を自覚する時には、忽然として自分の環境、外界の物質、固い、固定した、動かし難い、打ち壊し難い存在と思われていたところの障礙は、それはすべて吾が心の影の世界であつたと分るのであります。外界はすべて自分の心の影であつて、それはさながら蜃気楼のような世界である。心に思った通りに現れる世界であるということが分つて来る。この時、我れ宇宙に立つて、心の利器をつかんで自由自在にふり廻すとき、環境も困難も自由自

在になつて来る。必要に応じて雲を招び、雷霆を駆使し、一切の運命を館のように捻じ曲げることが出来ることが解つて来るのであります。これが『生長の家』の説く根本の真理であります」（二八八―二八九頁）

「心によつて外界の事物を自由自在に在らしめる」、この谷口雅春先生の教えによつて、日本共産党の幹部クラスの人物をはじめとする多くの左翼活動家が生長の家の門を叩いて入信してきたことが本書でも紹介されている。外界を変えるのは権力や暴力ではない、心である。その根本真理によつてこそ、この世界は光明化し、地上に天国浄土を実現させることができる。と説く谷口雅春先生の教えこそが、真に人間を救い、社会を救い、国家を救い得る唯一の道であることが力強く説かれているのである。

令和二年一月吉日

谷口雅春著作編纂委員会